

# 『幻を追う人』読解のこころみ(2)

井上三朗

## 目次

1. はじめに
2. 欲望の世界
  - (1) マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ
  - (2) プラス夫人のサディズム的態度と不幸への愛
  - (3) マニュエルの欲望の苦悩
  - (4) 『在り得たこと』における欲望の世界
  - (5) まとめ
3. 死の魅惑と恐怖
4. 結び

(太字は今回掲載分)<sup>26)</sup>

## 2. 欲望の世界

### (1) マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ

『幻を追う人』において、肉体的な欲望をいだくのはマニュエルだけではない。マニュエルの欲望が顕在化する第一部第八章以前には、マリー＝テレーズの欲望の揺れ動きもみとめられる。そして注意すべきことに、その欲望は信仰に後続するかたちで描かれている。そこでまず、マリー＝テレーズの信仰をもんだいにするところからはじめたい。

第一部の語り手マリー＝テレーズははじめのうち、マニュエルが家にひきとられてきた、十四歳当時の自己の内的状態を語っている。当時のマリー＝テレーズの内面を支配するのは宗教である。マリー＝テレーズは修道女たちの経営する学校にかよっており、とくにルイズ修道女の影響をうけて、カトリックの信仰をつちかっていく。と同時に、修道女たちへのあこがれをつのらせていくのである。

「わたしは学校が大好きだった。静かな声でわたしを叱る修道女たちの天使のようなきびしさが大好きだった。(…)わたしは修道女たちを愛していた。羨んでいた。で

きることなら自分もまた彼女たちと同じように、サージの服を着て、かろやかな衣ずれの音をたてながら歩きたかったし、彼女たちの顔にみられる人間ばなれした、驚嘆すべき表情を永遠に身につけたいと思った」(I-4、p.222)。

この箇所は、修道女たちへのあこがれが高じて、自分もまた修道女になりたいと願うにいたったマリー＝テレーズの心の動きをうまく表現している。また、マリー＝テレーズはこう言っている。

「ルイズ修道女が主の祈りや幾節かのアヴェマリアの祈りをとなえるために、午後のおわりにわたしを礼拝堂に連れて行ったとき、わたしはほかのところにいるよりもそこにいるほうが幸福に感じるのだった。静けさ、さわやかさ、蠟燭の小さな炎がゆらめいている薄明かり、丸天井の下を支配している平和、こうした環境の一切のものが、わたしの夢想癖を助長するのだった」(I-5、pp.227-228)。

この件りでは、ルイズ修道女といっしょに礼拝堂にいるときの幸福感が語られるとともに、礼拝堂という環境がマリー＝テレーズを夢想にいざなったことが述べられている。こうしてマリー＝テレーズは必然の、避けがたい結果として、修道生活へのあこがれをいだくにいたるのである。

しかしこの修道生活へのあこがれは、マリー＝テレーズの周囲の人びとの導きによってもたらされたものでもある。マリー＝テレーズは学校時代のことをふりかえりつつ、「無垢なる魂にしかけられ、自分の魂のうえで静かに閉じられた天の畏」の存在を指摘し、「自分のまわりでたくらまれていた宗教的な陰謀」に言及している(I-4、p.224)。マリー＝テレーズの修道女になりたいという願いは他者の意向に沿ったものであり、必ずしも自発的、能動的なものではないのだ。くわえて、この願いは生徒たち、修道女たちに良く思われたいという気持ちにも源を発している。この点にかんして、マリー＝テレーズは修道女になる決心を公けにしたあとの人びとの対応、すなわち、生徒たちの注目の対象になったことや、上級生が告解の順番をゆずってくれたことや、ガロ神父が「幸福の涙」を流させるほどの「感動的な口調」で自分の魂について長々と話してくれたことを思い出しながら、「わたしは誇らしい気持ちでどうにもならなかった」と言っている(I-5、p.228)。ここからわかるように、他人に評価されたい、他の生徒たちよりも優位に立ちたいという世俗的な感情が、修道女になるという決意をささえ、あるいはもたらしているのである。また、マリー＝テレーズは「自分が愛されていることを知りたいという現世的な欲求を、人びとは天国への憧憬と取り違えていたのだろうか」(I-4、p.224)と自問している。この一文では、ただ単に人から愛されたいという願いが修道女

になる決心をもたらしたことがほのめかされている。ミシェル・ラクロはおそらくこの文を踏まえたいうで、次のように論じている。

「彼女〔マリー＝テレーズ〕がこの場所〔修道院付属の学校〕でしか感じない愛されることの幸福が、宗教的な天職に召されていると考えるように駆りたてるのである。だがこのいつわりの召命は、彼女の感情の過剰を昇華したものをあらわすにすぎない」<sup>27)</sup>。

ミシェル・ラクロは、愛されることの幸福をもとめる人間的な欲求が修道生活へのあこがれを生じさせており、マリー＝テレーズの召命が過剰な地上的感情を昇華させたものにすぎず、それゆえにいつわりのものであるとみなしている。マリー＝テレーズの修道生活へのあこがれは、このように人間的な感情に根ざしており、霊的な欲求もしくは信仰のたかまりの所産では必ずしもない。マリー＝テレーズもまた、自分の召命のことをかえりみてこう結論している。

「いまとなってわかるのだが、宗教的な感覚はわたしには欠けていた。(…) わたしが召命とみなしていたものは、ルイズ修道女やマリー＝アルフォンシーヌ修道院長の真似をしたという欲求にすぎなかった」(I-12, p.259)。

マリー＝テレーズもまた、自分の召命がいつわりのものであり、世俗的な欲求から修道生活へのあこがれをいただいたにすぎないことを認めている。とはいえ、だからといって、ここで断言されているように、「宗教的な感覚」がマリー＝テレーズに欠如していたとはみなしがたい。召命がにせものであるとしても、少女時代のマリー＝テレーズの内心を支配するものは、やはり信仰であり、この信仰は疑うことができないのではないだろうか。マリー＝テレーズは別のところで、自分が「完全な生活を熱望していた」(I-10, p.253)と述懐している。この「完全な生活」(une vie parfaite)とは、信仰上の要請にもとづくものにほかならない。また、マリー＝テレーズは、「わたしの軽薄さも、自分のうちに、カトリックの大いなる郷愁の幾分かが宿ることを妨げはしなかった。この世の道が連れ戻すことのない失われた祖国を惜しむ気持ち」(I-4, pp.224-225)と言っている。ここでは、マリー＝テレーズの内心に宿った「カトリックの郷愁」と「失われた祖国」への愛惜の念がもんだいになっている。「カトリックの郷愁」とは言うまでもなくカトリシズムにひかれる気持ちのことであり、「失われた祖国」とは、この世にはみいだしえない神の国を指し示している。とすれば、この言葉を読むかぎりでは、少女時代のマリー＝テレーズが正真正銘の信仰をもっていたことは否定できない。さらにまた、マリー＝テレーズは、十四歳のころに使っていた黄楊の数珠の匂いを嗅いで、昔の自分

にもどっていた思い出を喚起している。

「数年のあいだ、わたしは、そのころのものである黄揚の数珠をひき出しの奥にしまっておいた。黄色い木の珠の匂いはとても強かったので、その匂いを嗅ぐだけで、わたしの少女時代の数分間を、身振りや言葉ではなく、一時期の特別な味わいを自分のうちに甦らせるのに充分だった。わたしは一種の眩暈を感じていた。問題なのは、もはや回想ではなく、消え去ったひとつの世界が、その光と息吹きと束の間の夢想とともに再生することだった。神を信じない者になったとはいえ、わたしは信仰と呼ばれるあの不可思議な領域にふたたび浸るのだった。その数珠を顔に近づけるだけで、わたしは昔の少女にもどった。そしてその少女にとっては、魂の祖国がこの世の平野のむこうにある大きな庭園のように輝いているのだった。今やわたしのところは空っぽになり、黄揚は魔法の匂いを完全にうしなってしまった、そう完全に。わたしがそうであった昔の人間はもはや存在しない。わたしが話しかけても、その昔の人間がわたしの話を聞くことはないだろう」(I-9, p.248)。

この文章は、大ざっぱにいえば、黄揚の数珠の匂いが、宗教から離れてからのマリー＝テレーズを少女時代の信仰の世界に連れもどし、その信仰の世界にひたさせたことを語っている。そして「魂の祖国がこの世の平野のむこうにある大きな庭園のように輝いているのだった」と書かれているが、この記述は、黄揚の数珠の匂いを嗅ぐことでよみがえった神の国へのあこがれ・郷愁を示唆しており、少女時代の信仰が揺るぎない、確固とした世界を形成していたことをうかがわせる。実際、黄揚の数珠の匂いを嗅ぐだけで「消え去ったひとつの世界」が再生する以上、その世界はもはや漠然とした、曖昧なものではありえない。したがって、マリー＝テレーズの召命がほんものではないとしても、少女時代の彼女の信仰の欺瞞性をあげつらうことはできない。マリー＝テレーズのかつての信仰はそれなりに真摯なものであったとみるべきであろう。このことは、過去を回想する語り手マリー＝テレーズの現在の宗教的立場が、「わたしがそうであった昔の人間はもはや存在しない」と言われているように、過去の信仰の残滓すらない、完全に無宗教の状態にあるという事実によっていっそう際立っているように思われる。少女時代のマリー＝テレーズは、批判の余地はあるとはいえ、修道生活へのあこがれをいなくほどに熱烈な信仰をもっていたと考えるべきではないだろうか。マリー＝テレーズの修道生活へのあこがれは、世俗的な感情を浮き彫りにするけれども、同時に、それなりに真摯で熱烈な信仰を証すものとしてあるのである。

さて、マリー＝テレーズの、修道女になりたいという願いは、母親のプラス

夫人によって放棄させられることになる。プラス夫人は学校に行ってマリー＝アルフォンシーヌ修道院長と面談し、娘の願いを完全に絶つのだ。夢がやぶれたマリー＝テレーズは、プラス夫人が修道院長と会った日の晩のことを、「それから、わたしに家庭生活を憎ませるにいたった、あの果てしない夕べのひとつがはじまるのだった」(I-6, pp.235-236)とふりかえっているように、倦怠感しかいだかせない家なるものを憎むにいたる。そして「もしわたしが自由なら、(…)もしわたしが自由なら！」(p.236)と考えているように、自分を閉じこめ、拘束する、牢獄のような家から逃亡したいと切実に望む。この自由＝脱出への切望は、マリー＝テレーズを新たな世界へといざなう。第一部第七章で描かれているように、短い眠りからさめたマリー＝テレーズは窓の外に見える夜の光景に酔いしれ、夜の差し出す未知なる世界のなかで解放感をあじわうのである。

「わたしは何か新しいもの前に向かっていた。これまでに目にした世界はその力、その現実性をうしなっていた。その世界のかわりに、今や夜が君臨していた。これまで夜をながめ、夜を愛することは、わたしには断じて許されていなかった。(…)わたしは自由だった。あるいは少なくとも、恐れや心配ごとや今日の昼間にわたしをつなぐものすべてを忘れた。

この瞬間の興奮が、自分でも驚いたような奇妙な動作をわたしに思いつかせた。わたしは寝間着を脱ぎ、自分のからだをながめた。それは宗教の禁じる不純な行為だったが、それ以後二度と覚えたことのないようなよろこびをもたらしした。生まれてはじめて、掟を犯す人に固有のあの陶酔をあじわった。(…)今まで一度も目にすることのなかったこの肉体の白さを見てわたしは感嘆した。そこに手を置いて心地よいさわやかさを肌で感じた。そしてどうしてそれが悪なのか、自問するのだった」(p.238)。

マリー＝テレーズは夜がもたらした解放感のなかで、自分のからだをながめ、自分のからだに手をふれている。そうすることで「よろこび」(plaisir)ないし「陶酔」(ivresse)をあじわっている。この「よろこび」ないし「陶酔」はまぎれもなく肉体的なものである。それゆえ、上の引用文はマリー＝テレーズにおける官能のめざめを物語っている。このことは、自分の行いが「宗教の禁じる不純な行為」であり、「掟を犯す」ことであり、要するに「悪」であることを、マリー＝テレーズが承知していることから明らかである。修道生活の望みを絶たれたマリー＝テレーズは自由＝脱出への願いを宗教の世界ではなく、官能の世界に身を投じることによって満たそうとするのである。そしてここで大事なことは、マリー＝テレーズが信仰の世界から抜け出ることで官能の世界

にはいつているという点である。言いかえれば、肉体的な高揚が宗教的な高揚にとってかわっているのだ。つまり『幻を追う人』において、肉体的な欲望は宗教と無関係に示されているのではなく、宗教とかかわりのもとに、すなわち、信仰と対峙あるいは対立するかたちでもんだいにされているのである。

このことに関連して、マニュエルがマリー＝テレーズの前に欲望の人間としてはじめて出現するのが、修道生活への願いがかなわぬものとなった時点であるという事実は注目すべきであろう。プラス夫人が修道院長に会いに行った日の夕食まえ、マニュエルはマリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出すため、十一時にひとりで食堂に来よう誘う。マリー＝テレーズは夕食後、この誘いを、自分の「自由への願いに答える」ものであるかのごとく思いかえしている（I-6、p.237）。マニュエルはマリー＝テレーズの自由＝脱出への願いに呼応するかのように登場し、欲望を開示するのだ。マニュエルの欲望もまた、マリー＝テレーズの信仰と対峙もしくは対立するかたちで置かれているのである。

『幻を追う人』における、このような信仰と欲望との対峙・対立は、作品の構成の問題としてだけではなく、作者グリーンの内心の軌跡を示すものとしても重要であろう。ここで作品の自伝性について少しふれておきたい。まず指摘したいことは、マリー＝テレーズにおける修道生活のあこがれが一時期のグリーンのものでもあったという点である。グリーンは1916年4月にカトリックに改宗した。以後グリーンは、霊的指導者のクレテ神父の導きもあって修道士になることを夢見ながら熱烈な信仰のなかで生きた<sup>28)</sup>。だが父親の意向や第一次世界大戦勃発のために修道生活の計画は延期された。そして1919年の4月、グリーンは地上への愛着が原因で修道士になることを断念する。こののちグリーンは深刻な肉体的苦悩を知る。マリー＝テレーズと同じように、修道生活へのあこがれを捨て去ることで、欲望の世界に入り込んでいくのである。もっとも、グリーンの場合、信仰の世界から欲望の世界に単純に移行するわけではない。1916年4月から1919年4月までの宗教的高揚の時代においても、肉体的高揚に悩まされることはあったし、修道生活の計画を放棄したあとも、徐々に宗教から遠去かったとはいえ、全面的に信仰をうしなったわけではない。けれども1919年を境にして、グリーンにおいて欲望が優位を占めるようになることはたしかであろう。したがって、作品における信仰の世界から欲望の世界への移行は、過去のグリーンの内心の歩みを反映しているのである。

とはいえ、作品における信仰と欲望との対峙・対立は、同時に執筆時点でのグリーンの内面の状態をも暗示しているのではないだろうか。マリー＝テレー

ズをとおして、修道生活へのあこがれがもんだいにされるのは、作品制作時点でのグリーンのうちに、はげしい信仰を生きた一時期への愛惜の念と、カトリックの信仰への憧憬があるからにはほかならない。マリー＝テレーズは、「カトリックの大いなる郷愁」と「失われた祖国を惜しむ気持ち」について語っていた。これらは、小説作成時のグリーンが共有しうる感情でもあろう。また作中、信仰の世界のあとに提示される欲望の世界は当然、執筆時点のグリーンの内心を映し出しているであろう。それゆえ、マリー＝テレーズの信仰と官能のめざめ、およびそれにつづいて開示されるマニユエルの欲望は、グリーンの過去における内心の軌跡だけではなく、現在のそれをもきざみこんでいるとみなされるのである。

## (2) プラス夫人のサディズム的態度と不幸への愛

『幻を追う人』において、欲望の揺れ動きはマリー＝テレーズやマニユエルだけでなく、プラス夫人の内心からもみとめられるのではないだろうか。プラス夫人のうちには抑圧された欲望がひそんでいて、これが作品を欲望の世界にするひとつの要因となっているように思われる。そこで次に、プラス夫人のあり方を検討することにしたい。

プラス夫人は不幸な結婚をした。独身時代、彼女にはエマニユエルという婚約者がいた。だが妹のリーズがこのエマニユエルをうばい、結婚してしまったため、彼女は愛してもいないプラス大佐と結婚した。そんなわけで大佐とのあいだにできた娘マリー＝テレーズはプラス夫人にとって自らの不幸の証しでしかなく、母親としての愛の対象にはならない。「わたしは母の目には、口惜しまぎれに自分の意志に反して結婚した男の娘に映りつづけるのだった」(I-5, p.232)とマリー＝テレーズは書いている。かくしてプラス夫人はあたかも自己の不幸にたいして復讐するかのように、マリー＝テレーズを苦しめることに存在理由をみいだすのである。マリー＝テレーズは自分にたいする母親の態度を次のように回顧している。

「時どき、母はわたしを罰するという口実のもとに、遺恨でわたしを責めたてるのだった。母は、宗教が中和するにはいたらぬこの毒の全体から徐々に解放されるのだった。実際、母が呼吸するためには、わたしが少し苦しむ必要があったのだ。そのとき母の魂のなかでいかなる不正な均衡が回復されていたかは知らない。しかし母はわたしの魂にもたらし心の動揺を楽しんでいたし、一言で言えば、それによって生きていた」(I-5, p.232)。

ここでは、「母が呼吸するためには、わたしが少し苦しむ必要があったのだ」

というところが特に注目される。プラス夫人は、愛してもいない男と結婚したこと、自分が不幸であることの怨みを、マリー＝テレーズを苦しめることで晴らそうとするのだ。そしてこの一節からは、娘に苦しみを与えることで生きるよろこびをあじわい、かろうじて内心の「均衡」をたもとうとするプラス夫人のあり方が浮かびあがってくる。マリー＝テレーズにたいするプラス夫人の態度はサディズム的なものであるといえよう。

マリー＝テレーズが修道女になりたく思っていることを知ったときの、プラス夫人の対応もこのような文脈のなかで理解することができる。プラス夫人は不幸意識をもつがゆえに、娘の幸福を望まない。そのため、娘の願いを踏みにじる機会をじつとうかがう。マリー＝テレーズが運悪く朝寝坊をした日にその機会がやってくる。プラス夫人は朝、「召命に対する嘲り、ほとんど侮辱」とうけとれる「皮肉な薄笑い」(I-5、p.229)をうかべながら娘に接し、午後になると娘の学校に行き、修道生活の計画を流産させてしまう。そして学校から帰った夕方、娘が修道女になるに値いしないことを主張するために、娘の過去のあやまちを一つひとつ取りあげて娘を責めたてる。そのときのプラス夫人は以下のごとく描かれている。

「血が母の顔を赤く染め、母に若さをとりもどさせていた。動いている澄んだ目は、ただ単なる怒りだとばかり思っていた興奮の影響をうけて、たえず微妙に色合いを変えていた。時おり、舌先が乾いた唇を濡らし、鼻孔がびくびくと動いた。酔ったような表情が顔をゆがめていた。わたしの目の前にいるのは、怒りが生の泉そのものを蘇らせている一人の女だった」(I-5、p.232)。

プラス夫人は怒りに身をゆだねている。その怒りはプラス夫人の顔を赤く染め、目の色を変えさせ、鼻孔をびくびくと動かしている。怒りは、「生の泉そのものを蘇らせてい」と書かれているように、プラス夫人の生の活力となって、まさに夫人を生かしている。このことは、プラス夫人が怒りのなかで「若さ」をとりもどしていることから明瞭である。プラス夫人の怒りは、ただ単なる怒りではなく、一つの情熱のごときものと化しており、抑圧された欲望のはけ口となっているのではないだろうか。プラス夫人はマリー＝テレーズの修道生活の夢を打ちくだき、過去の罪状をあばきたてることでマリー＝テレーズを苦しめる。プラス夫人は娘に苦しみを与えることを官能的に楽しんでいるかのようだ。夫人が「酔ったような表情」を顔にうかべているのはそのためであろう。プラス夫人は娘を苦しめることの官能的なよろこびをあじわいながら、自らの不幸をいやそうとしているように思われる。このように、修道生活を望

んだマリー＝テレーズにたいする反応をとおして、プラス夫人のサディズム的態度がみてとれるのである。

次に、プラス夫人のマニユエルにたいする態度をみてみることにしよう。プラス夫人は夫に先立たれてから六週間後、すでに孤児になっていた甥のマニユエルを、男手が必要だという理由で家にひきとる。だがそれは口実にすぎない。マリー＝テレーズはマニユエルが同居するようになったことによつて、「母はおそらく数年前から彼〔マニユエル〕を付けねらっていたのだらう」(I-2、p.215)と言ひ、「若い男〔マニユエル〕が我が家の敷居をまたぐのを見たとき、母の胸は高鳴っていたとわたしは確信する。二十日鼠を付けねらう猫のイメージがここではふさわしいだらう」(I-2、pp.210-211)と述べている。いったいなぜ、プラス夫人はマニユエルを付けねらい、家にやってきたマニユエルを見て胸を高鳴らせるのであろうか。それはやはり、マニユエルがかつて自分の愛した男エマニユエルの息子であるからであらう。けれどもプラス夫人はマニユエルを愛するために家にひきとるのではない。なるほどマニユエルが闘病生活にはいつてから、プラス夫人はマニユエルのそばに献身的に寄り添う。しかしマニユエルを家にひきとる当初の目的は、愛する男と結婚することができなかった自らの不幸の報復をすることにあるのではないだらうか。プラス夫人が「猫」に、マニユエルがその「猫」に付けねられる「二十日鼠」になぞらえられているところからうかがえるように、マニユエルはプラス夫人にとって、苦しみを与えるための格好の獲物にほかならないのではないだらうか。マニユエルを家にむかえたときのプラス夫人の胸の高鳴りは、愛の情熱ではなく、サディズム的欲求の胎動を示すように思われるのである。

そんなわけで、プラス夫人はマニユエルを優遇しない。マニユエルに割りあてられた部屋は、床の薄板がはがれ、自転車のような「大きな品物の塊」が置かれた物置同然の部屋である(I-2、p.209)。そしてプラス夫人はマニユエルを傷つけるために、マニユエルの容貌の醜さをことさらに話題にする。第一部第八章でマニユエルは、昼すぎにプラス夫人が勤め先のエルネスト氏の店にやってきて、「ぼくが男前でない」と言ひ、それから「ここ一年でぼくが醜くなった」と教えたことを、「苦惱」のまなざしを投げかけながらマリー＝テレーズに報告している(pp.239-240)。また、第一部第三章には、次のような叙述がみいだされる。

「言葉の上の礼儀正しさのようなものだけが、天性の残忍さを和らげていた。母は逆上しなかった。このうえもなく耐えがたいことを言うために控え目な言葉を用いたし、

時として、甥にご親切な忠告をするとみせかけて、甥を涙にかきくれさせることさえあった。母はあわれな青年の醜さにかんするありとあらゆる種類の考察をとめどなくおこなった。巧妙な回り道をしてたえず彼をそこへ連れもどすのだった。〈ただしお前のお父さんは美男だったと思うよ〉と母は言うのだった、〈わたしたちが子どもたちに古い衣服をのこしてやるのと同じくらい簡単に、容貌上の美点を伝えることができないのは残念なことだよ〉。

(…)

〈可哀想に、わたしたちはいったいどうしてこの世に生まれてきたのだろうか?〉  
(pp.219-220)。

プラス夫人は、マニュエルの醜さを、マニュエルの父親の美しさと対比しつつ言いたてることで、マニュエルを苦しめようとしている。「可哀想に、わたしたちはいったいどうしてこの世に生まれてきたのだろうか?」というさいごの問いかけからは、言葉によって徹底的にマニュエルをいためつけ、虐待しようとするプラス夫人の姿勢がみとめられる。この姿勢は、はじめに指摘されるように「天性の残忍さ」にもとづいており、サディズム的な欲求をうかがわせる。同様に、「時として、甥にご親切な忠告をするとみせかけて、甥を涙にかきくれさせることさえあった」という証言からも、プラス夫人のサディズム的態度がみてとれよう。プラス夫人にとってマニュエルが愛情をそそぐ対象ではなく、サディズム的な欲求をみたすための道具であることがこの件を読むことによって了解されるのである。

さらにプラス夫人は、病いの悪化のためにマニュエルがエルネスト氏の店での勤めをやめざるをえなくなったときに、マニュエルにたいして冷酷な態度をとっている。第二部第四章、プラス夫人はマニュエルから辞職の話聞かされて、「お前は、わたしが金持ちだとでも思っているのかい」(p.286)と言う。マニュエルは、「ぼくは働きます、マダム・プラス」(p.286)と答える。これにたいするプラス夫人の反応を、マニュエルはこうふりかえている。

「——それで坊や、お前は何をするつもりなのだい? 森に行つて栗をひろつて、市で売るとかい? ねえ、自分のからだをよく見ることだよ。お前のお父さん、ああ、お前のお父さんはすばらしい体格をなさっていたよ、いいかい、それも徹底的にだよ。精鋭の兵隊さんのような肩、胸は…… (…)

このあと、ぼくのよく知っている描写、伯母が結婚できなかった男の描写がつづいた。讚嘆に恨みが混じっていた。父親へのうらみをはらすために、伯母は息子の顔に、息子が受け継がなかったすべての美点を投げつけるのだった。力や美しさや上機嫌や

魅力を」(pp.286-287)。

プラス夫人はマニユエルの父親の長所を枚挙し、称賛することで、マニユエルの欠陥をあばきたてようとしている。そうすることで、ここでもまた、マニユエルを苦しめようとしている。プラス夫人がマニユエルをさいなもうとしていることは、このあと、「お前の面倒をみてやるよ」(p.287)と言っているように、マニユエルに働かせるつもりなどないにもかかわらず、仕事をやめたマニユエルを非難しているところからも明白である。マニユエルの世話をする気なら、彼の父親の美点を述べたてるにはおよばないし、職を辞したことをとがめる必要もない。あたたかくマニユエルに接するか、あるいはだまって新たな事態を受けとめればよいのである。ところがプラス夫人はそうはしないでマニユエルを責めさいなむ。これはサディズム的態度にはかならない。また、上の引用文で、プラス夫人のふるまいが「父親へのうらみをはらすため」であると認識されていることは着目すべきであろう。プラス夫人がマニユエルの父親と結婚できなかったせいで不幸意識をいだいており、自らの不幸の報復をするためにマニユエルをしいたげていることがわかる。マニユエルへのサディズム的態度もまた、かつて愛した男への怨念がこもっているがゆえに、マリー=テレーズへのサディズム的態度と同じく、抑圧された欲望によってみちびかれているといえるのである。

ところで、プラス夫人のサディズム的態度からは、不幸を愛する夫人のあり方が浮かびあがってくる。プラス夫人のあり方は一言でいえば、不幸への愛という言葉によって特徴づけられるのではないだろうか<sup>29)</sup>。夫人のサディズム的態度も、結局はこの不幸への愛の中に包含されるように思われる。そういうわけで、不幸へ愛という観点からプラス夫人のあり方を検討することにしたい。

プラス夫人の不幸への愛はまず、「誰も母ほどに寡婦よもめになるすべを知らなかった」(I-2, p.210)という表現からうかがうことができる。この表現は、夫を亡くしたプラス夫人が黒い服を身にまとして、この上もなく見事に喪に服したという事実を踏まえており、未亡人になるという不幸を嬉々としてうけいれているありさまをかいまみせている。それから、幸福、よろこびへの憎しみあるいは敵対も、不幸への愛とのかかわりで把握することができる。マニユエルはプラス夫人について、「よろこびの敵であるこの女性」(II-4, p.286)と言っているし、マリー=テレーズは「何であれよろこびというものは、たしかに母には怪しげなものに見えるのだった」(I-1, p.206)と書いている。よろこびを敵視し、もしくは胡散くさく思う態度は、不幸に拘泥するあり方と裏

腹な関係にある。また、プラス夫人が娘の修道生活への願いを打ち砕くのは、サディズム的欲求とともに、幸福それじたいへの憎しみ、つまり不幸への愛があるからだと思われるのである。

マニユエルが闘病生活にはいつてからの、プラス夫人の献身的な看病をとおしても、不幸への愛を観察することができる。少し、プラス夫人の看病をみてもみることにしよう。マニユエルはエルネスト氏の店をやめる前、すなわち、マリー＝テレーズを夜の散歩に連れ出した日の翌日から、熱を出して二週間ほど床についたことがあった。すでにこの時点から、プラス夫人はベッドに身を横たえるマニユエルに寄り添っている。看病のため不眠の夜をあかしたプラス夫人のことを、マリー＝テレーズは次のように回想している。

「朝になると、母は幾晩も徹夜したために、自分のベッドで休息をとるのだったが、疲労と不安のために顔はやつていた。目のまわりには黒ずんだ輪ができていた。母は食事中にうとうとすることがあった。しかしながら、時おり、いまだかつて一度も認めたことがないような、疲れたと同時に楽しげな表情がみられた。母は一つの夢の餌食になっているように見え、その夢の何がしかがまなざしの中に透けてみえた。洞察力があるわけではなかったけれども、わたしは、母が不安のさなかにあつてさえ幸福であることを見抜くのだった。しばしば母は、己れの天職をみいだした魂を思わせた。そのため、母は若々しい様子をとりもどしていたが、その様子は髪が灰色になっているだけになおさら奇妙だった」(I-10, p.251)。

ここでは、プラス夫人の変貌ぶりが語られている。「疲労と不安」のためにやつれた顔をしているにもかかわらず、「楽しげな表情」が浮かんでいること、そして、「わたしは、母が(…)幸福であることを見抜くのだった」と書かれているように、幸せそうにしていることが注目される。これはなにゆえであろうか。それは、看病をつうじて他者の苦しみに触れることができるからである。もっとも、プラス夫人がマニユエルの病いの治癒を願っていることはたしかであろう。しかし夜を徹しての看病という辛くて困難な仕事をささえているのは、不幸への愛ではないだろうか。不幸を愛するからこそ、看病が「天職」となりうるのだし、看病をとおして「夢」を追うこともできるように思われるのである。ここでの「夢」とは、他人の苦しみと不幸に接しながら生きたいという願いにはかならない。また、上の文章で、プラス夫人が「若々しい様子」をしていたと指摘されていることも注意をひく。すでに見たように、プラス夫人は怒りの中でも若返っていた。それゆえ、怒りは一つの情熱とみなされた。同じように、看病は、もしくは不幸への愛は、プラス夫人において情熱と化している

のではないだろうか。事実、マリー＝テレーズはプラス夫人の献身的な看病のうちに、「まったく人間的な情熱の目覚め」(I-10, p.252)をみてとっている。プラス夫人の献身的な行為はキリスト教的な慈愛とは無縁のものである。それどころか、プラス夫人はマニユエルの苦しみを目のあたりにして、彼の不幸を官能的に楽しんでいるのであろう。したがって、プラス夫人の看病から、あるいは不幸への愛から、抑圧された欲望の存在を読みとるべきであるように思われるのである。

では、マニユエルじしんはプラス夫人の看病をどのように考えているのだろうか。マニユエルの記述をみてみることにしよう。マニユエルは第二部第二章で、夜の散歩ののち病いの床についてプラス夫人の看病をうけたことを思い出しながら、こう書いている。

「伯母の家では、病人が王様だった。病気であるという事実によって、伯母の目には普通の間人よりもすぐれた人にみえるようになった。伯母は病人を、ありもしない美点の後光で飾りたてるのだった。もしほくが小説家なら、この奇妙な献身、この攻撃的な慈愛が、どんな謎めいた支配欲に通じていたかを示すことだろう」(p.269)。

この一節では、「伯母の家では、病人が王様だった」ことがまず指摘されている。「病人」が「王様」になるのは、言うまでもなく、病人が苦しみや不幸に接する機会をプラス夫人に与えるからである。次に、「伯母は病人を、ありもしない美点の後光で飾りたてるのだった」という言い方が目につく。不幸への愛が高じて、病人がプラス夫人の内心でほとんど愛の対象のごとき存在に変貌することが、この言い方からうかがえるのではないだろうか。「後光で飾り立てる」(nimber)という動詞は<後光>を意味する名詞 nimbe から派生した語であるけれども、病人を<後光>で輝かしめるのは、プラス夫人の内なる情熱ないし欲望だと考えられるのである。そしてさいごに語られているように、プラス夫人の献身的な看病が「支配欲」(besoin de domination)の所産であることは看過できない。この「支配欲」は所有欲と言いかえることもできる。愛情生活の中で満たされたことのないプラス夫人にとって、看病は他者を支配し、あるいは所有するためのこころみとしてあるのだ。ところで、肉体的な欲望とは、欲望の対象を所有したいという欲求にほかならない。よって、ここでの「支配欲」は、満たされない欲望、抑圧された欲望の屈折したあらわれとみなされるのである。

マニユエルの病いが悪化していくにつれて、プラス夫人は望みどおりマニユエルを支配するようになる。第三部では、マリー＝テレーズによって、死を間

際にしたマニユエルのさいごの日々が語られているが、プラス夫人は看病によってマニユエルを独占している。プラス夫人は午後、「自分の横に甥をすわらせ、二人は「白い壁を眺めながら物思いにふけ」るのだ (p.383)。そんな二人の生活ぶりを、マリー＝テレーズは、「彼らのあいだでは、沈黙とまなざしからなる親密さが強まりつつあった。この二人の人間の口から一言も発されることなく、数時間が流れることが往々にしてあった」(p.383)とふりかえっている。こうした二人の関係はその「親密さ」のためにマリー＝テレーズを寄せつけないほどのものであり、ほとんど恋人同士の関係を思わせる。そしてこの描写からは、プラス夫人がマニユエルの介抱をするという口実のもとに、病身のマニユエルをすっかり籠絡しているさまがかいまみえる。こののち、プラス夫人は娘を寄宿生にして、マニユエルの看護に没頭する。マリー＝テレーズがクリスマス休暇でもどってきたとき、彼女は家の中を支配する「深い沈黙」を感じとり、「異邦人」になったような感慨をいだく (p.384)。マリー＝テレーズは帰宅したときの母親とマニユエルの反応について、「一瞬のうちに、わたしは二人の顔に、人から邪魔された人間の当惑した驚きを読みとるのだった」(p.384)と書きとめている<sup>30)</sup>。二人のこうした反応は、マリー＝テレーズの先の感慨とともに、彼らの関係の、ますます深まった親密さを明示している。この時点でのプラス夫人のマニユエルへの献身は、彼にたいする大きな愛情に根ざしているのではないだろうか<sup>31)</sup>。プラス夫人はマニユエルを世話し独占することで、ひそかな愛の欲望を満たしているように思われるのである。

しかしながら、プラス夫人がマニユエルを愛するようになるとしても、彼女はマニユエルの人格ゆえに愛するのではなく、彼が病気であり、不幸であるがゆえに愛するのではないだろうか。この点にかんして、夫にたいするプラス夫人の感情についての、マニユエルの次の指摘は示唆に富む。

「とにかくほくに言えることは、プラス大佐があればほど健康でなかったならば、伯母はもっと夫を愛しただろうということであり、夫の急死を許してはいなかったということだ。なぜならその急死は夫の看護をし、死の間際までやさしく付き添うという幸福、よく考えてみると理にかなった幸福を伯母からうばってしまったからだ」(Ⅱ-2、p.269)。

マニユエルは、プラス夫人が夫を愛さなかったのは、夫が健康であったからであり、夫がもっと病弱であれば、もっと愛しただろうと考えている。この考察は、プラス夫人のマニユエルにたいする感情を考える際にも有効である。マニユエルへの愛の根底にあるのは、病い、すなわち不幸への愛なのだ。そして

プラス夫人における不幸への愛とは、他人の苦しみを見たいという欲求であり、この欲求はすでに述べたように、満たされない肉体的欲望、抑圧された欲望と大きく関係しているのである。

プラス夫人のサディズム的態度、それから不幸への愛<sup>26)</sup>を検討してきた。その過程で、プラス夫人の内部に、抑圧された欲望が潜在することを指摘した。『幻を追う人』において、欲望の苦しみは主としてマニュエルの内面をとおして表出されているが、プラス夫人のあり方をつうじてもかいまみられる。プラス夫人のあり方は作品を欲望の世界とするのに寄与している。この点に、作品の厚みないし奥行きがみとめられるのである。

#### 註

26) 目次の1. に該当する部分は『『幻を追う人』読解のこころみ(1)』、山口大学「文学会志」第46巻、1995、pp.58-71を参照。

27) Michèle Raclot: *Le sens du mystère dans l'œuvre de Julien Green*, Aux Amateurs de livres, 1988, t. I, p.446.

28) 具体的には、ワイト島のベネディクト派修道院に入ることが決められていた。

29) Jacques Petit は、「不幸への好み」(le goût du malheur) という言い方によって、プラス夫人のあり方を特徴づけている (*Julien Green, 《l'homme qui venait d'ailleurs》*, Desclée De Brouwer, 1969, p.144)。

30) マリー＝テレーズは、帰宅したとき、二人が互いに向かいあって坐っていた」(p. 384) ことも伝えている。二人の関係の親密さはこうした坐り方からも読みとれる。

31) マリー＝テレーズはすでに第一部第十章において、母親の看病を観察しつつ、次のように書いていた：「母が甥にたいしていただいている聖なる愛情は、より地上的な何かに奇妙にも似ていた」(p.252)。マリー＝テレーズはかなり早い時点から、母親の献身的な看病ぶりをおして、マニュエルにたいする地上的な愛の感情を読みとっている。

32) 不幸への愛は、マリー＝テレーズにおいてもみとめられる。マリー＝テレーズは、いっしょに住むようになったころのマニュエルにたいする感情についてこう書いている：「ふつう、わたしは従兄にたいして、無関心にかなり似かよった、漠然とした友情をいただいていた。しかし彼が気分が悪かったり、あるいは心配そうにしているのを感じるや否や、彼は不意にわたしの興味をそそののだった。彼の心配事は、わたしのうちに善良で情愛のこもった本能を喚び起こし、その本能はわたしを幸せにするのだっ

た」(I-3、p.217)。この文章では、マニユエルの苦しみ、マリー＝テレーズの関心をひき、マニユエルに親切にしてやるという本能を喚びさますことでマリー＝テレーズを幸福にしたことが語られている。また、マリー＝テレーズは、プラス夫人から顔の醜さを指摘されて悲嘆にくれるマニユエルを前にして、次のように反応している：「彼の悲しみは、わたしがその後幾度も感じたためによくおぼえている奇妙な感情を、内心に喚び起こした。できることならマニユエルにもっと醜く、もっと悲しんでいてもらいたいとわたしは願うのだった」(I-8、p.240)。このような反応からは、他人の苦しみをみたいというサディズム的な欲求が浮かびあがってくる。さらにマリー＝テレーズは、「わたしは、ひよわで傷ついた一切のものへの愛情を母から受け継いだのであろうか」(I-10、p.252)と自問している。ここでの、「ひよわで傷ついた一切のものへの愛情」は、不幸への愛という言葉によって言い換えられるであろう。